

6月

ぼんやりとした月の光が植物を照らす
薄暗がりでカゲロウが交尾んでいる

艶やかな直線が鎮座する木組み
丸みを帯びた、流れるような言葉

均一に塗りつぶしてきた霞み
かほり、微笑、湿り気を帯びた大気

ここは、まほろば
日本と言う国である

僕の中に微かな明りが灯るのを感じた
それを生命と呼ぶのかもしれない、と

部屋、ではない居場所
丸ごと世界を晒す場としての自己

僕の足は何を支えているか——
僕自身であり、あの天空であろう

虚栄ではない自我
取り巻く環境ではない他者

知っている、ということの閉じられた錯覚
僕は一体、何を見ていたのか

映像を捉えること、と
見る、ということの相違

遙か遠くにたなびいていた記憶が
次第に近づいてくるのを予感する

朽ちることを容認すること
再生を繰り返すこと

雨の気配に満ちた夜気
そこにたつぷりと含まれた——

面や線で構成されたものではなく
揺らぎから生まれた空間

カゲロウが羽ばたいている
やわらかで薄い羽

僕は人差し指を差し出し
その腹でゆっくりと大気を撫でてみた

うちふるえる五感をあげて触れること——
我々に残された自由

(2012.6.16)